
リアルジャスティス

楽天家masa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リアルジャステイス

【NZコード】

N5801C

【作者名】

楽天家masa

【あらすじ】

カインとガルフの数奇な運命をたどるファンタジー……なのかな?
？笑いあり涙あり（予定）のストーリーです。

第一章

「」の物語は七年前より始まる。

朝の光がカーテンから差し込んでくる。

「んー……」

少年はまぶしそうに布団にもぐりこんだ。少年の名はカイン。シヤインテラス国 の英雄であり国王でもあるカダディールの息子だ。

「王子。朝ですぞ！ 起きてくださいわ！」

いかにもじいやといつ感じの老紳士がカーテンを開け部屋に光を取り入れた。

「あと五分くらいいいじゃないか」

「ダメですじゃー！ 今田は王子の大祭な十年祭ですぞ？」

そうだった。今日はこの国の一一大イベント。十年前に革命が起き、同時にカインが生まれた記念日として執り行われる十年祭があるのであった。

「ふあああ……僕はそんなの別にいいんだけどなあ」「そんなことでは立派な王になれませんぞ？」

「王ねえ……」

正直あまりピンとこなかつた。五年ほど前からシャインテラス国は隣のルワーノ国と戦争状態なのだ。そのため、父親は国王だが英雄でもあるため常に戦場に出て行つて帰つてくることなどなかつため、面識がなかつた。

「みんな父さんはすゞじって言つけれど、写真でしか見たことないし話したこともないからよくわかんないや」

「カイン様のお父上のカダディール様は十年前に腐敗しきつていたシャインテラス国を自ら先頭に立ちこの国の危機を救つたお人なのじゃ……」

十年前の独立革命。この国の中で最も大きな出来事として語り継がれている。当時の国王カムールは悪政の限りを尽くしていた。そんな時立ち上がったのが王国軍第十三部隊隊長のカダディールであった。その時は誰もが革命軍の圧倒的不利のため残りの部隊にすぐに制圧されるだろうと確信していたが、カダディールの強さ、そして人望により次々と仲間を増やしついには革命を成したのだ。当然この国の教科書にも載つている。

「その話は何度も聞いたよじいや」

そう。IJの話はすでにハ十七回目だった。三桁の大台に行くのは時間の問題だらう。

「最近もひらくてしまいましてのう……せが、早く着替えてくださいされ」

「でも十年祭つて具体的にはどんなことするの？」

「簡単に言えばお披露目ばかりみたいな物ですじや」

「IJの戦争時にそんなことしてていいのかなあ？」

「IJの戦争時だからこそですじや。国民は戦争に疲れてますのじや。」

「こんな時だからこそ少しでも明るい話題がみんなほしいのですじや
「わかつたよ。それでみんな元気になるならそれでいいか」

なぜか少ししうれしい気分になつた僕は正装に着替えて部屋を出た。

「カイン様。十歳の誕生日おめでとうござります」

部屋を出てすぐのところにペッシュとしたスーツを着た男性が立つ
ていた。

「ありがとウバイス」

彼は僕の教育係で勉強から武術すべてを教えてくれている。元は
シャインテラス随一の腕前の戦士で、二つ名があるみたいだけど…
…忘れちゃった。

僕は大きな部屋に入った。いわゆる大部屋だ。

「カイン様 朝食が終わりましたら早速スピーチになるのでガン
ガン食べてくださいね」

吐きそうになるくらい山盛りになつた食事を前にして元気を振り
まく少女がいた。

「そんなに一杯は食べられないよ

彼女はメイドのメイ。歳は僕より五つほど年上で元気一杯のお姉
さん的な存在だ。

「そりいえ、せっかくの十年祭なのにこんな時も父さんは帰つてこ
ないのかい？」

じいやに聞いてみるとじこやは申し訳なさそう

「それが今国境付近でとてもまずい状況になつてゐるようでした、任務を離れられないのですじや」

「そうですカイン様。知つての通りこの国は独立してからまだ十年しか経つていません。国王様みずからが出陣しなければならぬいほど人材不足なのです。有力な人材はそれいつルワーノに襲われるか分からぬ重要拠点に赴いているため、そこを離れられないのです」

「それくらいは分かるけどね……」

「まあまあ、カイン様もさびしいんですね。まだ十歳になつたばかりなんですから」

「このじこや！ カイン様のためならどんなことでも…」

「私もですよ。カイン様」

「ありがとうございます。メイ。じこや。バイス」

この三人にはいつも世話になりっぱなしでこの息苦しい生活の中で確かに信頼できる人たちだ。

「じこさん頑張りすぎて死なないでくださいね」

「じりやメイ！ 年寄りに向かつてなんてことを…じこやはカイン様が死ぬまでは死にませんぞおおおお…」

「いや、それは無理でしょう」

ひややかなバイスのつゝこみが破裂。

「ぐう……じこやはショックで死にますじやあ」

「どうちだよ！」

「ほりほり、カイン様早く朝ごはん食べてくださいな　みんな待つですよ　」

朝食と格闘すること十五分。やつと食べた僕は考えたスピーチの練習した後、みんなの待つ広間への階段を上がった。
この階段がカインの歴史の始まりでもあった……。

第一章

俺は悩んでいた。「この国はなにかがおかしい。果たして何なのか？俺がおかしいのか？」

「くつ……なんで俺がこんなとこに……」

少年は暗い地下牢に閉じ込められていた。歳の数は十歳くらいだろうか。

「すまないなあ……これも親父さんの命令なのぞ」

人のよそぞうな看守が俺に向かって言ひ。

「親父……なぜ……」

本来ならば少年はこんなところには決して閉じ込められるような身分ではない。少年の父親はルワーノ国の国王なのだ。隣のシャイントラス国とは仲が悪い。

「なぜ……か。それはな、お前さんが強いからだ。父親の命さえも危ないほどにな」

少年は七歳ごろから戦闘のセンスの頭角を現してきた。先日行われた武道会に至っては優勝するほどだ。国王の息子で十歳にもかかわらず武道会で優勝したことは人々のあいだに瞬く間に広がった。

「武道会で優勝した。つまり出でていない国王を除いてお前さんは一番強い人間になつちましたのさ」

淡々と看守は話を続けた。

「やつなると国民の間で国王と国王の息子、どっちが強いかという話が出かねない。そこで国王は息子であるお前さんを幽閉したのさ」少年の父親はこの国で一番強い人物だ。ルワーヌ国は代々国王を決闘で決めてきた。常に一番強い人間が国王でなくてはならないとの思想の元そうなつたのだ。つまり現国王キングルドに唯一勝てるかもしれない可能性がある人物が息子のガルフなのだ。

「お前さんには正直同情するよ。まだ十歳なのに実の父親からこんな扱いうけちやあなあ」

「ここれから逃がしてくれ……」

「すまない……そんなことができる様な国じやないのはわかってるだろ?」

今この国は父親のキングルドによつて独裁支配体制に入つてゐる。そんなことをすればどちらもタダではすまないだろ?

「なぜだ……親父……俺は親父に少しでも近づきたくて猛特訓したのに・・・」

「この国はどうなつちまうのかなあ?」

「あ……お前さんの親父に聞いてくれ」

その時、奥の階段から誰かが降りてくる音がした。

「気分はどうだ?」

口ひげの立派な巨躯の男が立つてゐた。その姿を見るやいなや看守はすぐに敬礼をした。

「キングルド様！このよつな地下牢にどうなされましたか？」

「フン……ガルフの様子を見にきたのさ」

「！」から出せ！親父！」

言い終わった瞬間鼻先に剣が止まっていた。

「俺は国王だ。言葉遣いには気をつけるんだな」「くつ……」

「俺はまだまだ国王から退くわけにはいかないからな。そのためには今はお前は邪魔なのだ」

緊迫した時間が流れる。ほどなくしてガルフに向けられた剣をおろし、キングルドは厳しい顔をしたまま続けた。

「俺はこれからこの国の勢力を拡大しなければならない。そのためにはまずは隣国のシャインテラスを落とす。密偵の話では一週間後、向こうの革命十周年と王子の十歳の合同記念パーティーがあるらしい。油断しきつていてるところに奇襲をかけて今の小競り合いの関係を一気に大きな戦争に発展させる」

「親父！そんなことをして何になるんだ！？」

「フン。戦争というのは儲かるのさ。国を動かすというのはお前が想像してる以上に金がいるんだ。シャインテラスは十年前に革命が起きたばかりの地盤がしつかりしていない国。勝てる戦争をしかけないでどうする？」

「なんて卑怯な・・・」

「卑怯？俺にとつてはほめ言葉だな。だが忘れるな。そんな俺の血をお前は受け継いでいるのだ」

「それじゃシャインテラスの人々はどうなるんだ！？」

「そんなものは知らん。俺は俺の国を考えていればいいんだ。それがリーダーと言うものさ」

「さて。これ以上お前と話をしている暇はない。奇襲のための準備があるからな」

言い終わるとキングルドは不適な笑みを浮かべた。

「やうだ。ガルフ。お前にプレゼントをやるわ。恨みといつプレゼントをな」

「看守のお前！」

「は、はー！」

「特別任務だ」

「はい！」

「これから向こう十年間、ガルフを禁固刑にする」

「そんな……それはあんまりでは？」

「看守が口答えするな！ 罪状は反逆罪だ。下手なことをするとお前もぶちこむぞ！」

ドスの聞いた声で看守を齧すと、ガルフを一齧して元来た道を帰つていった。

「……看守さん」

「なんだい？」

「この国はどうなつてしまふんだる」

「さあ……ただ、このまま行くと大変なことになる」

「みんなかわいそつだ。この國の人もシャインテラスの人も」

「君はキングルドのように冷徹な人間じゃないみたいだね。どこか温かみがある」

「なんだかわからないけど……ありがとう」

「どういたしまして。なんかこいつなつちやつたから自己紹介しておぐね」

牢屋越しに看守が手を伸ばしてきた。

「僕の名前はリック。歳は一十三歳だ。よろしく」

「俺はガルフ。十歳だ。」

「はは……知ってるよ。有名なだもの。でも十歳にしては大人びた感じだね」

「この喋り方もこの国で生き残るために必要だったから……」

そういうと不意にガルフの目に急に涙があふれてきた。

「つらかったんだね。これからはおそらく僕とガルフ君の二人だけの時間がかなり長く続くと思う。できる限り協力するからよろしくね」

「……リックさん……」

少年は初めて人から優しくされたのか、その場で泣き崩れた。

「俺、強くなる！」

「うん。ガルフ君はまだ十歳だ。これからいくらでも強くなれるよ。肉体的にも精神的にもね・・・」

ここより数年、ガルフとリックだけの時間が地下牢で流れることになる。上の世界がどんなに変わっても一人だけの時間が……。

広間にファンファーレが鳴り響いた。

「キャー！カイン様！」「カイン様バンザーイ！」「次期国王バンザーイ！」

「うわあ……凄いね？」

「みんなカイン様のために集まってくれたのです。歓声にお応えになられてはどうですか？」

「そうだねバイス。なんか僕が王子だって実感が少しづつわいてきたよ」

「じいやは嬉しいですぞー！」

「なんかじいやキャラ変わってるね」

「メイもなんだかうれしそうだね？」

「そりゃあもう カイン様の晴れ舞台ですもの」

カインのために集まつたのは百や二百ではない。数万人があつまつているのだ。

「あ、そうだ。スピーチしなきゃ」

「カイン様。原稿です」

「ありがとバイス」

カインがマイクの前に立つと徐々に歓声が静かになつていった。

「えー……今日は独立達成、そして僕の十歳の誕生日も兼ねての十年祭です。今、僕たちはルワーノ国と戦争状態にあります。ですが、今のところ国境の小競り合いで済んでいます。それも、父である力ダディールや、革命の立役者である四騎士のおかげだと思っていま

す。これから先、一十年、三十年と平和が続くよう尽力致します。
僕はこの国が大好きです。早く戦争のない世界になることを願います。

カインはそういうとこりと笑つて

「みんなーー！ 今日は楽しんでね！ ありがとうーー！」

会場が歓声と拍手に包まれたその時であつた。爆音と共に悪夢は起つたのである。

「フハハハハハ！ われはルワーノ国王キングルド！ 貧弱なシャイ
ンテラスの諸君に挨拶に参つた！」

ある者は最初の爆発で。ある者は剣で。ある者は馬の下敷きに。これまで幸せな雰囲気に包まれていた会場は一瞬にして殺戮の現場へと変化した。

「あ……ああ……そんな」

カインは言葉にならない言葉をもりしてその場を見る」としか出来なかつた。

「…」れは見せしめだー シャインテラス国民をなぎ払えー！」

逃げ惑う民を待ち伏せしていたのか次々と悲鳴があがる。

「カイン様！ こちらへ！」

バイスがカインを逃がそうと腕を引っ張る。しかしカインはその場を動くことが出来ない。

「カイン様！ しつかりしてくださいーー じいやヒメイが逃げ道を確保してくれています！」

「でも……でも……みんなが……」

「今は逃げることをお考えくださいー もうすぐカダティール様が駆けつけてくれるはずですー！」

次々と国民が殺される光景にカインは絶望した。

「くつーー！ 失礼しますーー カイン様ーー！」

バイスは無理矢理カインを抱き上げその場を去ろうとした。次の瞬間、巨躯の男が立ちふさがった。

「フン。物々しい警護だな。ひょっとしてそいつがシャインテラスの王子か？」

バイスは躊躇なくその男に護身用のナイフで切りかかつた。しかし、簡単にはじかれる。

「ほう。なかなかいい腕をしてるな貴様。となるとそいつが王子で間違いないな」

「そこをどけ！ キングルドー！ 王子に手は出させないーー！」

「邪魔だーー この俺に勝とうなぞ百年早いわあーー！」

次の瞬間バイスはキングルドの一撃に吹き飛ばされた。

「他愛のない。俺こそ最強。すべての者は俺に屈するのだ」
バイスは全身から血を流しぐつたりしている。

「あ……あ……」

おびえるカインに田を向け、キングルドは剣を振り上げた。

「あのカダテイールの息子に生まれたことをうらむんだな」

「あ……うわああああああああああああああああ

そこでカインの記憶は途切れた。

第四章

シャインテラス国のある森。木漏れ日が青年の顔を照らし田を
されました。

「つ、ん……またあの時の夢か……」

すつ……と水を差し出された。

「起きましたか？カイン様」「

「ありがとう。メイ」「

「またあの夢を見たのですか？」

そう心配そうに聞いてくるのは左田に眼帯をしたバイスだった。
あの時全身大怪我を負ったが奇跡に一命を取り留めた。しかし、左
田を完全失明してしまった。

「ああ……もうあれから七年も経つのにね……」

そう。あの惨劇の田から七年の月日が経っていた。カインはあれ
から後のことと思い返していた。

「もうすぐお昼飯ができますよ」「

メイはある時なんとか敵の田をかいくぐり生き延びていた。七年
経つた今でも周りに元気を与えてくれる元気娘だ。周りと言つても
俺を含めて四人だけだけど……。

「そうですね。そろそろお昼にしましょう。その後は今日も特訓で

すよ? 「

バイスは今でも武術を教えてくれている。あのとき俺に命を救える力があればこんなことにはならなかつたからだ。とはいえ当時十歳だった俺に何が出来るわけでもないのだが……。

「カイン様ー! うまそつな魚が取れましたぞー!」

そう叫びながら一人の老人がカインに走ってきていた。そう、じいやだ。今でもしぶとく生きている。意外といつかやつぱりとうか……。

「わっすがじこやわん やるッ わっそく料理しますねー……あれ?」

メイはじいやが釣つてきた魚を見ると表情が曇る。

「じいやたこ……! れ……毒があつて食べられない魚……もしやカイン様暗殺計画ー?」

「な……なんじゅとー! わしが一時間も粘つて釣つたのに……だがしかしーし! こんなこともあらつかとキノコもとつてきたのじゃ!」

どんなことを想像してたのか分からぬナビジコやはキノコをメイに差し出した。

「! ジ……これはー、じこやー! やっぱり毒キノコじゃないですかー!」

まあお約束とこうやつだ。

「じいやは最初から当てにはしていませんでしたが……」

バイスは冷ややかにじいやをいじめている。いつもの光景だ。

「なんじゃとー！ バイス！ おぬしは何もじとらんではないか！」「失礼なー。ちゃんと森で薪を拾つてきましたよー。」

バイスの後ろには薪が山のようになつている。あんなにいるのだろうか？

「まあ一人とも喧嘩しないで。ほり、『飯できたみたいだよ？』『喧嘩するなら一人ともあげませんよー？』」

メイの一言で穏便にお昼ご飯タイムとなつた。なぜこのよつなサバイバル生活をしているかといつと、あの時ルワーノの奇襲で大打撃を受けてシャインテラス国がルワーノ国の支配下に落ちた。当然王族であるカインは処刑されるので城の人達に手伝つてもらい逃げ出したのである。しかしシャインテラス国はすでに全てルワーノ国に支配されているため身分を隠しこのような放浪の旅をしているのだ。

「やういえば何での時簡単に攻め入られたんだろう？」

ふとした疑問をバイスにぶつけてみた。

「信じたくはありませんが、おそれらく国境を守つていた四騎士のうちの誰がガルワーノ国と内通していたのでしょうか……」

「そつか……父さんはどうしたのかな？ 僕と同じように逃げられたかな？」

「どうでしょウ……生きていても私たちと同じように身分を隠して

「このので探すのは困難でしょう。……」

「……で会話はとまってしまった。メイビジコやは心配せりにカイソを見ていた。

「ヤツリジヤー、」の辺りにロブンテロといつ温泉を売りこしている町があつたはずじや！ 気分転換にそこにいつてみてはどういかの？』

「そうですね　たまにはゆつくりするのもいいかも」

「うん。そうしようか……いよね？ バイス」

「ええ。カイン様が行くところがワタクシの行くところですから」

満場一致で温泉でゆつくつめりとこひことになった。

「それじゃ飯を食つたらいくとするかのー」

「じいやさん覗かないでくださいね？」

「…………するはずがなかろうへ。」

その間が氣になる。

「大丈夫ですよ。私が見張つてますから」

「カイン様あ。この、老体を踏がいじめるのじやあ……」

「はは……ま、まあとりあえずその町に行つてみよつか」

「おー——————」

階段を下りる音がした後扉が開く音、そして鍵をかける音がする。

「またルワーノが勝つたみたいだよ」

「そうか……親父はどこまでやれば気が済むんだろうな」「きっと全てを手に入れるまでじゃないかな？ ガルフ

セツヒツリックは椅子に腰をおろした。

「シャインテラスを奪つてから七年。いまだに反乱軍との戦いは続いているみたいだね」

「どうちも決め手を欠いてるんだろうな。リックはどう思う？」

「まあこのままだと近いうちにキングルドが一斉攻撃に移るんじゃないかな？」

「どうちにしても俺らには関係のない」とか

ため息混じりにガルフがつぶやく。

「ああ、七年もこの地下牢に閉じ込められてる僕らにはね」

ガルフが地下牢に閉じ込められてからすでに七年が過ぎていた。地上ではキングルドがシャインテラスを落としたそうだ。しかしルワーノ国民の暮らしが良くなつたかといふとそうでもなかつた。そのせいでルワーノ国、元シャインテラス国両方から反乱が起こつてゐらしい。しかし圧倒的な軍事力を誇るガルフの父親、キングルドが今のところ制圧に成功している。両反乱軍にちゃんとしたリーダーがないのが原因らしい。もつともリーダーがいたとしてもキングルドの圧倒的軍事力の前に成す術はなさそだが。

「リック。今日も何か面白い話をしてよ?」

「そうだなあ……じゃあ今日は遠く西の国の神秘の力の話をしようか」

「神秘の力?」

「ああ。僕の生まれ故郷の西の国には神の使いと呼ばれる人達がいるんだ」

「どんな力が使えるんだ?」

「そうだね……例えば素手で鋼鉄を引き裂いたり、ものすごく早く走ったり、数十メートルジャンプしたりしてたね。まあ僕が小さいころの話だけね」

「リックはできないの?」

「僕は出来ないよ。あこがれはしたけどね」

「そんなことが出来たらこんな国の看守なんてやってないか」

ガルフは残念そうに言つた。

「まあいつか故郷に帰つたら教えてもらうこととするわ」

「俺もリックの故郷に行つてみたいな」

「三年後の話になりそうだね」

「三年後に出られたらいいがな……あの親父のことだから忘れてるかもしれないぞ」

「ははは……ありそでこわいなあ」

キングルドがリックとガルフに言つた命令は十年。もっとも、人が地下牢を出る日は一人の予想に反してすぐそこまで来ていた。

第六章

カポー——ーン。

「ふう……いい湯ですじや……」

「ほんとですねえ……ずっと浸かってみたい気分ですね」

「じいやの腰痛に効くかな?」

「ボケにも効くといいですね」

「なんじゃとお! わしはまだボケとらんぞお!」

「おや。失礼。もつてつきり手遅れかと……」

「ふんぬ————! あつ……血圧が……」

「じいやしつかりー死んじやダメだー!」

「カイン様……わしの遺産はタンスの上から三番目

の引き出しにまつてありますじや」

「ほう……大事にもらつておきましょ!」

「バイス! おぬしにはやらん!」

「でもじいや……旅の途中なんだからタンスなんてあるわけないよ

?」

カインは当然の疑問をぶつけた。

「はつ! しまつた! うつかりですじや

「やつぱりボケが始まっていますね……」

そこからバイスとじいやの壮絶な戦いが始まるのだが割愛しよう。
ここは温泉町のメイトール。その温泉の効能と周りのすばらしい景色のため観光の名所となっている。そのため元シャインテラス領の町だが、あまりルワーノの手が入っていない数少ない町だ。おかげでカイン達もあまり怪しまれずに町に入つてこられたのだ。

「もう……もう少し静かに入つていたいなあ……」

そうつぶやいたのはメイだ。当然女風呂の方に入っている。七年
前は十二歳だったためほぼ筒型だった体系も二十歳になった今はし
っかり出るところは出て引っ込むところは引っ込んでいる。ないす
ばでーと言つやつだ。

「それにしてもここの景色はすごいなあ……さてよかつたかも」

メイの田の前には壮大な山並みが顔を並べていた。当然男風呂の方からでも見えるのだが、あの三人の田にはあまり入っていないだろう……戦いに夢中で。

「あれ？隣が静かになつたわ？」

男風呂では壮絶な戦いが終わつた。じいやとバイスがのびて風呂に浮かんでいた。引き分けだつた。迷惑なことこの上なかつた。

「凄いなあ……じいやはまだまだ現役でいけるんじゃないだろうか
？」

カインの感想も「もつともだ。とにかく変わって女風呂。

「どうもここにちは」

メイに負けず劣らずの美人が挨拶をしながら入ってきた。メイをかわいいとするならこの女性はきれいといったところか。

「ここにちは　ここいいところですね」

「ええ。ここは初めて?」

「旅の途中でたまたま寄つたんです」

「そう……それならなるべくこの町から離れた方がいいわ」「え？ どうして？ こんなにいいところなのに……ルワーノの侵略もうけてないし……」「だからこそよ……」これはもうすぐ……」

女性が言いかけたところで、メイは山の方から何か光る物を見た。そこにはライフルを構えた兵士が見えた。女性を狙っているようだつた。

「危ない！」

メイは女性に飛びかかった。その瞬間銃声が響いた。女性がいた後ろに着弾した。メイが飛びからなければ間違いなく女性を貫通していただろう。

「くつ！ 奴らね！」

女性はそう言つと脇に置いてあつたタオルから拳銃を取り出し山に向けた。しかしもうそこには狙击手はいなかつた。

「大丈夫ですか？」

「ええ。ありがとう。助かったわ」

「それにしても誰だつたんだろう？ もしかして私が狙われたのかしら？」

「いいえ。確実に私を狙つてたわ。えつと……」

「メイです」

「メイさんね。改めてお礼を言つわ」

「いえいえ……それより……」

ザツパアアアアアアン。

「どうしたのじゃメイ！」

なにやら銃声だったようですか……おや?別の女性もいらしたん

ですか

いナ……俺は止めかんが、アモレーナヤとハベスガ

そう。じいやとバイスとカインが上から落ちてきたのだ。

十一

一木？

「奇？」

三人そぞろでナテナガ浮かんた

三人はメイの手によせてお星様になりましたが、めでたしめでたし。

「メイさん。今の人達は？」

あ、気にしないでください。ちよつとした知り合いですから・・・

どうやら仲間とののが恥ずかしかつたらしい。

「そう。私の名前はリリイ」

気にはない性格らしい。

「メイさん。お礼をしたいのだけ……あなた、ルワーノをどう思
う？」

お礼とルワーノが何の関係があるのかメイにはさっぱり分からなかつたが正直に応えることにした。

「はつきり言って大嫌いです。私達の今の生活もあいつらの……いや、何でもないです」

「そう……それなら大丈夫ね。是非お礼がしたいから明日の午前十時にこの町のレヴォという喫茶店に来てくれない？」「馳走するわ」

「そんな悪いですよ……まあでも甘えちゃってもいいかな？」

「ええ。さつきの三人もお仲間なんでしょう？一緒に来てかまわな
いわ」

「あちや……ばれてましたかあ」

「だつてあの三人あなたの名前知つてたもの」

「それならお言葉に甘えて四人で行きます」

「それじゃ私は少しやらないといけないことができたから先に上がるわね」

「はーい また明日ー」

リリイは少し険しい表情で女風呂を後にした。

「はあ……平和だわ……」

意外とメイはのんびり屋なのかもしれない。この頃お星様になつた三人はまた女風呂を覗こうと頑張っていたのだが結果が見えてるのでここでは割愛をせてもらつ。それから数時間後とあるホテルの一室にて。

「…………」

「もーしわけありません」

「…………」

「もう一度と覗かないと誓いますのでどうか機嫌をなおしてください」

三人が平身低頭で謝っている相手は言つまでもなくメイだ。時刻は午後九時。

「…………で？」

そこには鬼の形相のメイが立っていた。カイン、バイス、じいやの三人が土下座している。あの後再三お風呂を覗いていたのを再三メイに見つかったのだ。当然の結果である。

「まつたく……カイン様もこんな一人の影響受けちゃってどうするんですか？」

「返す言葉もございません」

「じいやさんもいい歳なんだからいい加減にしてくださいね？」

「キモに銘じておきますじや」

「バイスさんもカイン様の教育係を名乗るならちゃんと教育してください！」

「いや……！れも立派な……」

言いかけたところでバイスは何もいえなくなつた。メイの顔が鬼から般若に代わつたからだ。これ以上言つと命がないことを悟つた。

「もういいわ。そのかわり三人とも明日は私の言つことを聞いてもらいますからね」

「ありがとうございます！」

三人はハモつて言った。

「よろしい。んじゃ明日十時にレヴォつていう喫茶店に全員で行くわよ」

「何があるの？」

「お風呂で知り合った女性を助けたらお礼がしたいって言われたから皆でいくの」

「その人は信用できるのですか？」

バイスは不振に思いメイに聞いてみた。

「まあ私達の正体がばれてるってわけでもないから大丈夫だと思いますよ？」

「それならいいんですが……」

「まあ大丈夫じやろ……わしらは死んだことになつておるしおう」

そう。あの騒動の中カイン達四人は行方不明という扱いになつていた。それから何年経つても見つからないということで一年ほど前にルワーノ国政府は行方不明から死亡に切り替えていた。ちなみにあの時の行方不明者は三万人と言われている。

「でもお風呂でこの町を離れた方がいいって言つてたのよね

「ほう……そのリリイという方が言つてたのですか？メイ」

「ええ。言いかけたところでスナイパーに気がついて結局何のことかわからなかつたけど……」

「何か恐ろしいことでも起こるんかのう？ 喫茶店にいかずにそのまま出た方がいいんじゃないのかの？」

「まあでもせつかくお礼してくれるって言つてるんだし行かなきや失礼になっちゃいますよ？」

「そうだよじいや。それにいざとなつたら俺もバイスもいるんだし。七年前よりは強くなつたからちょっとやそつとの騒動は大丈夫さ」

「まあでも気をつけておいたほうがよさそうですね……明日はカイ

ン様を必ずお守りします」

「ありがとうございます。さて寝ようか」

「そうですねー。ほら、早く歯さん出て行つてください。いつまで
レーティの部屋にこるつもりですか?」

そうメイに急かされ三人は部屋を出た。表情はしぶしぶと言つた
所だったが……。

第七章

「ゴゴゴ……」といつ地響きと時折砲撃のような轟音がそこに鳴り響いていた。

「何が起こってるんだ？ リック分かるか？」

「ちょっと分からな……上に行つて様子を見てくるよ」

リックは地下牢を出て地上の様子を見にあがつた。リックの見た光景はルワーノ国旗が燃やされ、ルワーノ兵士が何人も倒れている現場だった。

「こ……これは……」

「おい！ そこのお前！ 何してん！ 早く逃げろ！ 反乱軍が押し寄せてきたぞ！」

ルワーノ兵と思われる男がリックに叫んでいる。しかしへこからか飛んできた銃弾によりその兵士はそこで命尽きた。

「これはまずいですね……」

遠くの方で反乱軍が大勢で押し寄せてきてるのが分かる。大急ぎでリックは地下牢に戻り入り口付近にあつた鍵を持ってガルフの元に走つた。

「リック。何が起こつたんだ？」

「まざいぞガルフ。反乱軍が攻めてきてる」

「本当か？ ここは腐つてもキングルドの治めるルワーノ本国だぞ

？」

「実際来てるんだから嘘も本当もないさ。もつともキングルドは今は元シャインテラス領に視察中みたいだがな……」

「だろうな……じゃないこうも簡単に攻められるはずがないか……」

……

「こんなことをされてもガルフは父親の強さだけは信じているようだ。」

「今鍵を開けるから一緒に逃げるぞガルフ」

「そうだな……こんな騒動でもなければ逃げられそうにもないしな」

……

七年ぶりに鍵穴に刺さった鍵はなかなか開かなかつた。

「さび付いてやがる！」

一分ほど奮闘してリックは牢屋の鍵を開けた。

「開いた！ 逃げようガルフ！」

「まさかキングルドの言つた期限より早く牢屋を出ることが出来るとはな・・・」

この国でのキングルドの発言力は絶対なのだ。

二人は地上に上ぐるための階段をひたすら上がつた。そこで二人が見たものはすでに焼け野原となつてゐる城と周りを取り囲む兵士たちだつた。

「俺たちは反乱軍だ！ お前たちは何者だ！」

隊長らしき男が話しかけてきた。リックは考えた……。ここで嘘をついてもすぐにばれて殺されるだけだと。それならいつそ……。そう考へてゐる間に先にガルフが口を開いた。

「俺はガルフ。この国的第一王位継承者だ。もつともそんな権限はないがな……」

「ガルフ？ 第一王位継承者？」

男は少し考え込んでいた。その時ガルフ達が出てきた所を調べていた兵士が帰ってきた。

「隊長！ この下は牢屋になっています！」

「たしかガルフ王子は七年前から行方不明のはずだが……なぜこんなところに……」

「それはこのリックがお答えしましょう。答えは簡単。当時十歳だったガルフが武道会で優勝したために父親であるキングルドがその才能に恐れてずっと幽閉させていたのです」

「ふん……嘘か本当かわからないからその一人を動けないように縛つてグール様のところまで連れて行け！」

すぐにガルフとリックは動けないように縛られた。そのまま王の間まで連れてこられた。もつともここは反乱軍に落とされてたのでそこにいるのはキングルドではなくグールと言つ反乱軍のリーダーだった。

「グール様！ 地下牢にてルワーノ国のがルフ王子だと張る二人組を捉えてまいりました！」

「何？ ガルフ王子だと？ 馬鹿を言え。あいつは七年も前から行方不明ではないか」

「それが、幽閉されていたとのことです」「まあいい。連れてこい」

ガルフとリックがグールの前まで連れてこられた。後ろには槍を

持った兵士が一人の首元に槍を突きつけていた。いつでも殺せるようだ。

「一人いるのか……七年前に十歳だったから……おやりくお前か？」

グールはガルフに目を向け聞いてきた。

「ああ……俺がガルフだ。七年前に親父に牢屋に入れられた」

「キングルドならやりかねんが……証拠はあるのか？」

「そんなもんはねえよ……あるにはあつたが幽閉されるときに取り上げられた」

「じゃあ信用できんな」

それまで黙つて聞いていたリックが何かを思い出したように口を開いた。

「…………ある…………あるぞ。僕の右ポケットを調べてくれ

そこから出てきたものは、ルワーノ王家しか持つことの出来ない紋章が入ったペンダントだった。

「ほう…………これは間違いないな。本物のガルフ王子か……」

「最初からそういうてるだろ」

少しグールは考えて何かを思いついたようにニヤリと笑った。

「ガルフ王子。キングルドが憎くないか？」

「憎いに決まってるさ。なぜそんなことを聞く？」

「俺たちは今キングルドのやり方に反感を持つて反乱軍を起こし俺がリーダーをやっている」

「だからなんだ？」

「実はガルフ王子に頼みがあるんだが……これは本物の王子であるあなたにしか出来ないのですよ」

なぜかグールは急にガルフに対して敬語になつた。

「頼み？」

「今の反乱軍は数はそれなりにいるのにいつもキングルド軍に負けている。なぜか？ それは圧倒的なカリスマ性を持ったリーダーがないなかつたからなんですよ」

「なるほど。それでキングルドの息子である俺に反乱軍のリーダーになつて民衆の力を得たいということか」

「その通りですよ。しかしあなたは何もしなくともかまいません。あなたの存在だけで民衆はついてきますので」

「キングルドの息子というだけで民衆は離れて行きそうなものだけどな」

「そんなことはありませんよ。何故かあなたが幽閉されている間に民衆の中にはガルフ王子が王様になればいいという声が一杯ありましたからね」

「俺がリーダーになればルワーノ国民は幸せになるのか？」

「それはもう。キングルドさえ倒せば反乱軍の役目は終わり。あとはガルフ王子が王位についてもらえば……」

「少し考えたい。一日くれ。あと、俺とリックの拘束は解いてもらう」

「わかりました。おい！ 二人に部屋を用意しろ！ あと一人の拘束を解け」

ガルフとリックは城の中の部屋に入った。というよりも閉じ込められたと言う方が正しいのだが……。

「リック。どう思つ?」

「はつきり言つてものすごく怪しいなあ」

「やっぱりそう思つよな」

「多分ガルフをリーダーにしてこの国の実際の支配権が欲しいだけの様な気もするけど……ガルフはどうしたいの?」

「俺は……」

ガルフは黙り込んだ。リックも無理に聞こうとせずにガルフが口を開くのを待つた。

「……俺はたとえグールに利用されているとわかつていても、父親と対決することになつても、この争いを止めたいと思つ」

リックはこいつと笑つた。

「やつぱりガルフはキングルドとは違つね。まあ七年も一緒にいてそんなことはとっくに分かってたけどね」

「絶対にルワーノ国民を幸せにしてみせる……」

「きっとそれはかなり険しい道になるよ……ガルフ」

翌日、再び王室にガルフとリックは向かつた。

「答えは出ましたか?」

「ああ……そのリーダーの役目。受けさせてもらひつ」

「おお、その言葉を待つてましたよ」

「ただし……いくつか条件がある。それを飲んでもらわなければリーダーにはならない」

「その条件とは?」

「まず、常に俺の近くにリックはいてもらひ。それからリーダーになる以上は俺が反乱軍を決定する。それでいいな?」

「はい。しかし、一つよろしいですか？ガルフ王子」
「なんだ？」

「ここのグール。これでも一応元リーダーなので反乱軍の軍隊の指揮
は私にとらせてもらいます」

「……………グール。お前の目的はあくまでキングルドを倒すことな
んだな？」

「ええそれはもう。それさえ果たせば他に何も望みませんよ
「わかった。指揮の腕は確かにようだから任せたぞ」

どこかに不安を覚えながらもガルフはグールの提案をのんだ。こ
れもルワーノの平和のためだと自分に言い聞かしながら。
この反乱軍の新リーダーにガルフ王子がなつたと言つ知らせはすぐ
にルワーノ全体に広がった。その時元シャインテラス領にいたキン
グルドにも……。

「反乱軍の新リーダーにガルフだと？ やってくれるわ反乱軍。だ
がその程度でこのキングルドを倒せると思つなよ！」

第八章

カラシノロン。

「四人ともお待たせ」

リリイが喫茶レヴォに入ってきた。待たせたと言つても五分程度だ。

「おお……お風呂で見た妖精さんは本物だつたんじやのう」「じいや。妖精つて何ですか？ お風呂にいた女性ではないですか。やはりもうろくしたくないですねえ」

「なんじやとおー！」

「ほら、二人ともこゝまできて喧嘩しないで。メイもとめてよお」「知りません」

どうやらメイは無視を決め込んだようだ。

「面白い人達ねメイさん」

「子供ばかりで困りますわオホホホホホ」

「キャラ違いますよ？」

次の瞬間バイスは口にガムテープをされた。冗談抜きで。

「そういうえばどうしてリリイさんは狙われていたんですか？」

「……それは聞かないほうがいいわ」

「ムガムガムガムガ」

「そうじやのう……気になるわい」

「でもこれはあなたたちの為に言つてるのよ」

「私達のため？」

「ムガムガ？」

「だつてあなたたちはルワーノから追われている身でしょ？」

「どうしてそのことを？」

「俺達のこと知ってるのか？」

「ムガムガ！」

「昔手配書で見たことがあるわ……もつとも手配されていたのは一人だけみたいだつたけど……」

そう……手配されていたのは元シャインテラス国王王子カイン。その側近のバイス。この二人なのだ。

「私が狙われたのはあなたたちに決して得ではない情報だから言わないのよ」

「ムガムガ……」

「だ――――――ムガムガ言つてんじやないわよ――」このムガムガ星人！

ムガムガ星人はここでお役ゴメンになつた。変わりにガムテープですつかりたらこいつになつたバイスがそこに立ち去へした。

「ゴホン……私達に関係のあることならなおさら聞かないといけませんね」

「そーよそーよ

「後悔するわよ？」

「別にいいよ……そろそろこの生活から抜け出したいし……」

「わしたちに話してみんかの？」

「…………わかつたわ……」

リリイはおもむろにコーヒーをすすり、話はじめた。

「今あなたたちは死んだことになつてゐるはずだけど、実際ルワーノ上層部ではいまだに探してゐるはずよ……」

「なんだって！ すっかり油断してた！」

「でしおうね……表向きは完全に忘れ去られた事にされているからね……」

「どうしてあなたがそれを知つてゐるの？」

「それが本題……あたしはシャインテラス解放軍のリーダーのリリイよ……」

「話には聞いたことがありますね……なんでもキングルドの最大抵抗力だとか……」

「ええ……だから相手の情報もそれなりに入つてくるわ……」

「その最大抵抗力がどうしてこんな温泉街に？」

「この町が観光地でルワーノの目が甘いからよ。他にも各地に仲間がいるわ。でもどうやらそれも昨日のスナイパーがいたところを見るとおとりだつたようね……」

「だから早くここを離れろつて言つたんですね」

「それにあなたたちはあまり解放軍にかかわらない方が……」

リリイが言いかけたときに一人の男が入ってきた。

「リリイさん！ 大変です！ ルワーノ軍が攻めてきました！」

「なんですつて！ 第一種戦闘態勢に入りなさい！」

「わかりました！」

リリイが号令を出したとたん店にいた店員や客が一斉に動き出した。どうやら全員解放軍のメンバーだったらしい。

「あなたたちも聞いたでしょ？ 早くこの町を出なさい」

「俺達も手伝う！」

「やうじゅやうじゅ！」

「メイも手伝います」

「やうですね……見逃せませんね……」

「……やっぱり今はダメ……気持ちはうれしいけど……」

「どうしてだよ！町の人達が心配じゃないのか？」

「心配に決まってるじゃない！」

「……ゴメン」

「でも大丈夫よ……今あなたたちが解放軍に現れたと知られたらおそらく一気にキングルドにつぶされる。まだ小さい組織だとキングルドに思わせておかないとダメなの……」

「……でもやっぱり手伝いたい！」

「カイン様……」

じいやとメイとバイスは田に泪を溜めていた。

「わかったわ……でも組織に入ることは絶対に許しません。あくまで義勇軍としてこの町を守つてもらえますか？」

「わかった。ありがとうございます！」

「やはりあのカダディール様の息子なのですね……底知れない力を感じます」

「……父さん……リリイ、何をすればいい？」

「そうですね……あなたたちがこの町にとどまるのは危険なのでこの町の西門に向けて進んでください。西側は一番戦力の薄い地域なのであなたたちの力に期待していますよ」

「わかった。西だね」

「ええ。そのままこの町から出てください。それではまた会える日を楽しみにしています」

「よし！三人とも！行くぞ！」

「わかりました。カイン様」

「このオイボレも頑張りますぞ！」

「はい リリイさん、またいざれ会いましょう」

「それでは解散！」

全員店の外に飛び出した。リリイは真っ先に大通りへと消えていった。

「じーちゃん そっちは北! ジーッちだよ!」

カインに引きずられるじーちゃん。ビーナスから典型的なボケが好きらしい。

「メイ! 遅れるなよ!」

メイの腕を引っ張つているバイクス。

「ちょっとバイクスさん……」

訂正しよう。メイの腕を引っ張つていてつもりで胸をもんでいる
バイクス。

「うむ! すまん! よし! いくぞ!」

「言つことはそれだけかー!」

さらに訂正。メイの腕を引っ張つていてつもりで胸をもんでいた
バイクスをひっぱたいたメイら一行は西に向けて走った。

「みんな気をつける! 敵だ!」

「ここには私に任せてもらいましょ!」

バイクスはスラリとナイフを抜いた。

「うおおおおおおおお」

ルワーノ兵士は力任せに剣を振り下ろしてきた。バイスはナイフで剣を受け流し強烈な当身を繰り出した。

「ぐああああ」

ルワーノ兵士は二メートルほど吹き飛ぶと氣を失った。

「敵兵は私が露払いをします。後ろについて来てください」

さすがは元シャインテラス随一の戦士。強さは並ではない。

「ううううときは頼りになりますね」

その時だった。敵に挟み撃ちにされた。前には三人。後ろには二人。迷わずバイスは三人を。カインは一人を相手にした。

「二人ともがんばるんじゃぞー！」

果たしてじいやの応援はいるのかどうかは置いといて、バイスはナイフを一人に投げつけた。ルワーノ兵士はナイフを剣ではじき返し、バイスに斬りかかってきた。その一撃を鼻先で避け、相手の手首をつかみもう一人に投げ飛ばした。しかし残りの一人がその隙に剣を横なぎにしてきた。その剣がバイスの首を捕らえたと思われた直後、バイスはさらにナイフを取り出しそれを受けた。

「さすがに三人は少しきついですね……」

しかしその三人がバイスに攻撃を仕掛けたことがなくなつた。

「腕なまつたんじゃないんですか？バイスさん」

一瞬のうちにメイが三人の首筋に手刀を繰り出していた。

「相変わらずですね」

やはりメイも元々王子の側近ということである程度の武術は会得しているようだ。じいやは別として……。（本当はわしも強かつたんじゃがのう……。じいや談）

一方カインの方も一人を相手に決して引けをとつてなかつた。カインは基本的にはバイスと同じナイフと体術で戦うタイプだつた。しかし、その才能は底知れぬものがあつた。

「ほらほら、そんな遅い剣筋じや俺は切れないぜ？」

二人の波状攻撃を難なくかわしていた。一瞬見せた攻撃の緩みをつき、二人を倒した。かなり目のいい人でないと見えないほどに技は洗練されていた。この一瞬の間に敵の手首に手刀をして剣を落とし、そのまま回し蹴りでもう片方を倒し、その上げた足をそのまま踵落としで一人目を沈めた。

「おお……カイン王子ご立派になられて……」

じいやは目に泪を浮かべている。

「ほんやりしている暇はありませんよ～ 急ぎましょ～」

バイスの声で四人はまた走り出した。

「それにしても腕を上げましたねカイン様」

「へへ……そう?」

「私との組み手の時は比べ物にならないくらいの強さがあります。本番で力を出すタイプなのかもしだせんね。やはりカダディール様の血を継ぐ者というところでしょうか」

「父さんか……今頃何してるんだろうな……」

「きっとどこかで生きてますよ」

「そうじゃそうじゃ!あのカダディール様を倒せる人間なんてそう

そうあらんぞ!」

「そうだな……うん!」

徐々に開けた場所に出てきた。そこには次々を解放軍を倒していく一人の兵士がいた。

「ふん……」んなものか解放軍

もうすでに三十人は倒れている。かなりの強者だろう。その男は大きめのマントをなびかせて大きな剣を振り回し風のように舞っていた。

「やめろ!」

カインとバイスは一直線にその男に向かっていった。男は一人を一撃するとその大剣を一閃した。

「ぐう……」

その剣圧でカインとバイスは弾き飛ばされた。すかさずメイとじいやが受け止めた。

「ほう……お前達二人……見たことあるな……特に眼帯の方、……」
バイスは背中に冷や汗を感じていた。ソレは強いとバイスの中で警戒音が鳴り響いていた。

「……まさか……シャインテラスの……」

男は何かに気づいたのか懐から一枚の紙を出した。それはカインとバイスの手配書だった。

「フフフ……ハハハハハハハハ！こんなところで旋風のバイスと会えるなんてなあ！」

「旋風？」

カインは不思議そうにバイスを見る。

「昔のあだ名ですよ。昔のね……」

「ハハハハハハ！……といつことは隣のヤツは王子だな？」

バイスの冷や汗は止まらない。間違いなく自分よりも強い相手だと悟った。

「俺の名前はジェイク。キングルド様直属の部隊、狼牙の隊長だ！」

「狼牙……なるほど……どうりで強いわけですね……」

「狼牙じゃと… まずいぞバイス！」

「じいやさん知ってるんですか？」

「ああ……ルワーノ国最強の部隊。その隊長となるとおもうべキングルドの次に強いはずじゃ……」

「西門はすぐそこです。私が食い止めますから三人は先に行つてくれ

ださい。」

「でもバイス！　一人じゃ危険だ！」

「お願いです……カイン様……おそらく今ジョイクと戦えるのは私だけのようですから……」

相変わらずバイスの顔つきは厳しい。その表情を読み取つてじいやとメイが動いた。

「じいやさん！　無理やりにでもカイン様を連れて行きます！」協力を

「わかったのじゃ！　頼んだぞバイス！」

「じいやより先には死ねませんからね・・・」

「その言葉嘘にするではないぞ！」

「でも……グウ」

鈍い音を立ててメイがカインを氣絶させた。

「ごめんねカイン様……」

「西門に出てから一時間以内に私が戻らない時はずっと西の方にあ
るハポンという村に行つてください。私の出身地できつと力になつ
てくれるはずです」

「わかりました……絶対に戻つてきてくださいね？」

「ああ……必ず……」

「俺が逃がすとでも思つてているのか？」

「分かっていませんね……私が逃がすんですよ」

バイスはジョイクとの距離を一気に縮めた。カキンという乾いた金属音があたりに響いた。

「こまじやー　逃げるぞー！」

カインとジージーとメイの三人はバイクとジョイクの脇をすり抜け
て西門へと去つていった。

「チッ……王子は逃がしちまつたか……まあいい……あの旋風のバ
イスとやれるんだからな……」

ジョイクはにやりとすると力任せにバイクを突き飛ばした。

「その名で呼ばれるのは懐かしいですね……」

「そうだろうな……今から十七年前のシャインテラスの革命で、そ
の武術で吸い込まれては飛ばされる光景に当時のカムール率いる國
王軍から『旋風』の呼び名で恐れられていたのがお前だ。その強さ
はまさに一騎当千だつたらしい。当時は一兵士でなかつた俺には伝
説の存在さ」

「否定はしませんけどね……」

「だがそれも昔の話だ……今のお前に俺を倒すほどの力は無いと見
た……」

「確かに……あの頃よりも力は落ちたでしょう……しかし、私は今
の自分が好きです。守る者がいるという強さを手に入れました
からね……」

「ハハハハハ！　強くなるのにそんなものはいらない！」
「…………」

第九章

大広間にて。

「首尾はいいな？」

「はい。大丈夫でござります」

「俺の計画はこれでまた一步前に進む……ぬかるなよ」

「はいお任せくださいグール様……」

そういうと男は闇に消えた。それと同時に大広間の扉が開いた。

「グール。戦況はどうなつていてる？」

「これはこれはガルフ様。それでは説明いたしましょう」

「なにかたくさんでそうだな？」

ガルフと一緒に入ってきたリックがグールに釘をさした。

「リック殿。たくさんでいるとは人聞きの悪い……これでも反乱軍の参謀なんでね……いろいろと策は練っていますよ……いろいろとね」

一瞬怪訝そうにグールを見たが、グールが説明の準備をし始めたので渋々席に着いた。

「さて。ここにルワーノの地図があります

テーブルの上に大きな地図が開かれた。真ん中の辺りに少しだけ青、国土の右半分が緑、左半分が赤で塗られていた。

「この青の部分が今回我が反乱軍が制した部分、緑の部分がガルフ様がリーダーになったことによつて反乱軍に参加した勢力、赤い部分がキングルドの勢力となつています」

「ふむ、戦況は悪くはないんだな?」

「ただ、今回はキングルド不在中の反乱だつたため半分しか味方についておりません……がしかし」

グールは赤い部分を指差した。

「この赤い部分は元シャインテラスの領地まだ手はあります」

「向こうの反ルワーノ勢力を取り込もうというのか?」

「その通りですよリック殿」

「だが上手くいくとは思えないな」

「どうしてだ?」

「いいかいガルフ? いくら俺達がキングルドに逆らつている勢力だとしても結局はルワーノなんだ。彼らはあくまでシャインテラス国として再建したい連中なんだからキングルドを倒したら次は僕達が敵になる」

「それはそうだな」

「ガルフ様。リック殿。ちゃんと策はありますよ……」

「ほう……どんな策なんだ?」

「俺もリックと同じ意見だ。知りたいね」

「ではご説明しましょう。今彼らには前の私達と同じようにカリスマ性を持つたリーダーがいません。そこでガルフ様に向こうのリーダーと接触してもらい協力を持ちかけるのです」

「なるほど……ガルフのカリスマ性を利用するんだな?」

「その通りですよ。その際には護衛としてリック殿にも付き添つてもらいますが……」

「僕はガルフより弱いぞ?」

「ですが今の反乱軍の中ではかなりお強い方なので……念のためと

「言つものですよ」

「確かに一人で行くのは危ないな。仮にも今は敵なんだから……」

「わかった。リック、一緒にいこ」

「そうそう、相手のリーダーの名前はリリイ、場所は……」

「バーン！」

「大変ですグール様！ ロブンテロがキングルドの軍勢に攻め込まれました！」

「なんですって？」

「なあグール……もしかしてその場所つて……」

「ええ。ロブンテロです。しかしキングルドに先を越されたみたいですねえ」

「これは一刻も早くいかなくてはいけないみたいだな……すぐにでも出発するぞリック」

「はいよガルフ」

「ガルフ様。おそらくこの襲撃で相手は場所を移すでしょう。こちらでも調べておきますがとりあえずロブンテロに向かってもらいます」

「わかった。そのリリイってやつ会って話をつけてくればいいんだな？」

「大丈夫。いざとなつたら僕が話すから」

「二人とも頼みましたよ……」

グールは地図を片付けると用事があると言つて出て行つた。

「さてリック。とりあえずロブンテロに行つてみようか？」

「ちょっとグールの動きが気になるけど……仕方ないね」

「確かにな……」

「……そしたら準備をしてくるよ。一時間後に正門で待ち合わせ

しょつ

「分かつた」

ガルフとリックはそれぞれ準備の為に自分の部屋に戻った。

「……必ず……平和に……」

ガルフは静かに、そして強くそう思った。

第十章

一時間後。

「バイス戻つてこないな……」

「でもきつと大丈夫ですよカイン様」

「そうじゃな。バイスも何か考えがあるんじゃね？。とりあえずバイスの言つておつたハポン村とやらに行つてみるとするかの」「うん……」

カインはあきらかに落ち込んでいた。自分の力の無さを痛感していた。

「強くなつたつもりでいた……でもあのジェイクには全然歯がたたなかつた……」

「カイン様……大丈夫ですじゃ！　バイスはあれでもかなり強いんじゃよ……十七年前のシャインテラスの革命の時にはカダディール様と一緒に中心人物として戦つてたからの」

「……わかった！　ハポン村にいこう！　バイスは絶対追いついてくる！」

まるで自分に言い聞かせるようにカインは一人に言った。

「ハポン村はロブンテロよりさらに西。シャインテラスの最西端にあるのじや」

「それならかなり遠いですね……どれくらいかかるんですか？　じいやさん」

「そうじやのう……わしの足で一週間といつたところかの？」

「それじゃあ私たちで一日ですね」

「わしの足はそんなに遅くないわ！」

「まあ五日ぐらいだらうね」

「うひ……カイン様まで……わしはじじいじゃないぞい！……じいや
じゅー！」

「どう違うんですかね？ カイン様わかります？」

「よくわかんないや」

「とにかくいきますぞい！」

「おー！」

三人はシャインテラス最西端のハポン村に向けて元気よく歩きだした。

…………そして一週間後…………

「……腹減ったよじいや……」

「私もお腹減りました……」

「わしもひからびそうじや……」

元々ひからびてるじゃん！ とツツコミを入れる気力も無い二人。時は昼！ 場所は森の中！ 半口もあれば森を抜けられると途中で出あつた人に言われ、意氣揚々と森の中に突き進んだ三人を待ち受けっていたのは、数々の罠！ ではなかつた。迷つたのだ。相変わらずお約束を繰り返す一行である。

「いっさつきも通つたよ……」

「そうですね……私も見ました……」

「わしの長年の勘がいっさいと当つておつたんじやがな……」

半日で出づれといわれる森をさまよつて早二日。予定していた食料は全て食べつくしてしまつた。はたして三人はここで飢え死に

してしまつのか？

「あははは……メイ……じいや……ステーキが見えるよ……」

半笑いでふらふらと歩くカイン。危ないヤツにしか見えない。

「うふふふふ……待つてえ……カイン様あ……」

半笑いでふらふらと追うメイ。危ないヤツにしか見えない。

「二人ともしつかりするんじゃ！」

幻覚を見る二人を必死で連れ戻そうとするじいや。嫌がる二人を無理やり引っ張る姿は危ないヤツにしか見えない。
かくして危ない三人の運命やいかに！

「そこで何をしている！」

そこには狩人姿の男が立っていた。メガネをかけいかにも神経質
そうな男だった。

「おお！ 助かった。すまぬが飯を食わせてもらえぬか？」

幻覚を見ていた二人も新しい登場人物に現実に戻っていた。

「天の助け！」

カインは叫んだ！

「天の導き！」

メイも叫んだ！

「ありがとう友よ！」

カインとメイはハモリながら男の手をとった。

「ここには素人が来る森じゃないぞ。何も知らない人間が踏み入れたら確実に出られない」

その狩人が言うにはこの森はある特別な木をたどつていけば簡単に通れるが、それをしなければ複雑な道が行く手をばみ迷つてしまふとのことだった。

「初耳じゃの？……」

「まあ俺が通つたから助かつたようなものだな」

「キャツ」

三人がホッとしたとき、メイが小さな悲鳴をあげた。

「メイどうした？」

カインとじいやがメイを見てみると痙攣を起こして倒れていた。

「さわるな！ 僕が見る！」

狩人がメイに近寄り、神妙な面持ちで体をくまなく見ていく。

「…………つ」

狩人がメイの右足首を見た時顔つきが変わった。

「まあいいな……」

狩人は自分の服の袖を破きメイの右足首をきつく縛った。

「どうしたんだ？」

「この女の子、猛毒の蛇に足首を咬まれている……急いで俺の村に運ぶぞ」

三人は大急ぎでメイを狩人の住む村まで運んだ。狩人はメイをベッドに寝かせて必死に何かの薬を塗っていた。おそらく血清か何かだろう。

「ふう……とりあえず命に別状はない。だが一日は絶対安静だ」

「ありがとうございます」

「自己紹介がまだだつたな……俺はジェス。このスナイ村で狩人をしている」

「スナイ村……まだにルワーノに対して侵略を許していない村と聞いたが……」

「ああ。ルワーノにしてみればこんな小さな村を落としても無駄といふことかもしれないがな」

「俺はカインと言います。俺の世話をしてもらつていいじいやと助けてもらつたのがメイです」

「じいやじゃ。おぬしなかなかの腕じゃのう」

「これくらい出来ないとあの森では生きていけないからな。それはそうとお前達はあそこで何してたんだ?」

「迷つてたんじゃ！　まいったか！」

「じいや黙つてて」

カインに言われじいやはしおらしくなつた。

「ロブンテロからハポンに向かう途中だつたんです」「それならあの森を通るくらいしか道がないな」「でももう森の抜け方を教えてもらつたので大丈夫だと思います」「そうじやの。あとはメイの回復を待つて出発するとするかのう」

カーンカーンカーンカーン。

「外が騒がしいな……」

半鐘の音が鳴り響く中、村中が赤みを帯びてきた。

「火事か？ちょっと行つて来る。一人はその子についてやれ」「わかつた」

ジエスは家を出て行つた。

「カイン様。あの男なかなかの身のこなしですぞ……只者ではありますまい」

「そうだな。この村でもかなり頼られているみたいだしな」

その時ジエスが大慌てで家に戻つてきた。

「大変だ！誰か攻めてきた！」

「誰か？ルワーノじやないのか？」

「違う！見たこと無いシンボルだ！」

「じいや！メイを頼む！俺は外を見てくる

「カイン様氣をつけるんじやぞ！」

カインとジエスは村の高台まで出てきた。少し遠くに数千の軍勢が見えた。おそらく後十分もしないうちに攻めに入るだろう。

「確かに見たことない旗だな……」

軍勢の中から一人の騎馬兵が飛び出して村の入り口までやつてきた。

「我々はルワーノ反乱軍グールの部隊だ！我々の躍進のためにこの村には滅んでもうう！」

「ルワーノ反乱軍……？ そういえばルワーノ本国が何者かの手によつて落ちたとリリイから報告があつたな……」

「リリイを知つてゐるのか？」

「お前もリリイを知つてゐるのか……ならば話が早いな

ジエスは羽織つていたマントを脱ぐと腕章を見せた。

「俺はこのスナイ村にいるシャインテラス解放軍リーダーのジエスだ。もつともスナイ村全体が解放軍みたいなものだがな」

「そういうば各地に仲間がいるつて言つてたな……」

「それにしてなんて数だ……とても小さい村を襲う数じゃないぞ」

「ジエス。俺も手伝うよ」

「そうだな。お前の仲間が回復するまでは手伝つてもうつとするか……だが戦えるのか？」

「それなら……大丈夫さ」

カインの顔はどこか決意を感じさせる表情だった。

「何があつたか知らんが期待してゐるぞ」

グールの部隊がついに村に入ってきた。入り口で陣形を組むスナイ村の人々は弓で応戦しているがすぐに破られるのは目に見えていた。スナイ村にいるシャインテラス解放軍のメンバーは三百人弱。対するグールの部隊は五千はいた。

「ふん……反乱軍といつてもやり方はキングルドと同じらしいな」「もつ……誰も殺させはしない……」

カインの脳裏には幼い頃に見た光景が思い出されていった。

「行くぞジエス！」
「当然。この村は俺が守る」

一人は一気に敵に突っ込んでいった。

「おお……ジエスさんが来ててくれたぞ！」
「みんな頑張るんだ！ 僕とこいつが相手するから援護を頼む！」
「了解！」

解放軍の全員が弓から槍に持ち替えた。

「いくぞ！」
「手はあるのか？」
「ある。相手は五千人以上いるんだ……それを逆手にとるー！」
「どうするんだ？」
「食料庫を襲う。そうすればやつらはルワーノまで撤退するしかないだろー！」
「それじゃこの村の食料が襲われるんじゃないか？ それに増援物資があつたら・・・」
「どっちも問題ない。この村の人口は五百人。例えとられたとして

もどう考へても足りない。それに相手は五千人を送り込んでいるからすぐにこの村を落とせると思つてゐる。だから増援物資もない

「結構考へてるんだな」

「これでもリーダーだからな」

ジェスは右手に斧を、左手に銃を構えた。

「狩人をなめるなよ……」

ジェスは足に力を込め相手との距離をグングンと縮めていった。

「カイン。十メートル先は踏むなよ」

ジェスは十メートル先の少し変色している部分を飛び越えた。力
インも続く。

「あれは？」
「俺達は狩人だ。当然罠も仕掛けある。村の外から見たらあそこ
の変色には気づかないように作つてゐる」

二人は敵の大群に突っ込んでいた。カインがナイフと体術で道
を切り開き、ジェスが斧と銃でどごめ役にまわった。

「食料庫つてのはどの辺にあるんだ？」
「あの狼煙の上がっているところだ。間違えるなよ
「はいよー・じけどけどけどええええええええ！」

一直線に食料庫を目指して一人だけで突っ込んでいく。残りはほ
かの槍をもつた兵士たちに足止めをしてもらつ。ジェスの見事な作
戦は的中した。

「お……おい！見ろ！食料庫が燃えているぞー！」

「まあいな……」

「どうしますか隊長？」

「ふむ……撤退だ！」

「全員退避！」

数時間後、ルワーノ反乱軍はすべて撤退していた。

「ジエス……どう思つ？』

「そうだな。随分とあつさり引き上げたところを見ると、今回は齋しのつもりだったのかもしれないな。出来れば落とそうという程度だつたのかもしれない」

「そのためだけにあの大群をよこしたと言つのか？」

「まあ全ては憶測にすぎないさ。今日はもう休め」

「そうだな……明日出発するよ」

そのままカインは休むこととした。その夜……。

「カイン……か」

ジエスは自室で難しい顔をしていた。

次の日の朝。

「うう……ん」

メイが田を覚ますと、右手と左手に温かいものを感じた。

「カイン様……じいやさん……」

セイジは心配がちの開元ひさ配心のカインとじこやがいた。どうやらまだ早朝のようだ。

「ずっとねばにいてくれたんですね……」

カインとじこやの顔を見てうれしくなった。そしてこの場にいな
いバイスを思こせびしくもあつた。

「起きたか？」

ジヒスが「一ヒーを持つて入ってきた。

「ジヒスさんが助けてくれたんですね？」
「そういうことになるな。一ヒーだ」
「ありがとうございます」

一人の手を離して「一ヒーを受け取った。

「むひや……」

「ん……」

「起こしちゃいましたね」

カインとじこやが眠そうに起きた。

「メイ……ひやんと回復したんじやのう」

「良かつた……」

じいことひこひめ娘。カインとじつには姉のよつな母のよつな存
在のよつだ。

「お前達も『一ヒー』いるか?」

「いだこうかの」

「いただきます」

それぞれに『一ヒー』を注いだ。

「それじゃ俺は狩の支度があるからもう行くな

そうこうジエスは自分の部屋に帰つていった。

「それじゃ俺たちもそろそろこいつか?」

「そうじやのう。メイ、調子はどうじや?」

「ばっちりです」

カインは少し晴れた気分でいた。

「カイン様何かいいことでもあつたんですか?」

少しでもこの村の為に役にたてたからだ。

「なんでもないよ」

そういうながらもその顔は少しばにかんでいる。

「昨日のカイン様はかつこよかつたんですね?」

じいやの顔も笑っている。

「えー……見たかったなあ」

メイの顔だけが少し膨れていた。

第十一章

バシャバシャバシャバシャ。

「うはー！ 気持ちいいなあ。ガルフもどうだ？」

行水をするリック。

「俺はいいよ。いつ敵に会うかわからないからな」

そういうながら剣を磨いていた。昔使っていた自分の剣はさびで使えなかつたので途中の町で買ったのだ。

「ガルフ……ずっとその剣を磨いてるな？ あの店の女の子に惚れたか？」

店の女の子とは剣を買った店の娘だ。かなり可愛かつた。

「…………つ」

ガルフの剣を磨くリズムが早くなつた。

「図星か……」

リックはにやつとするとガルフに水をかけた。

「何するんだよ！」

「いや何……暑そつだつたからな」

相変わらず「ヤーヤー」としている。

「ほりー もう行くぞー。」

剣を鞘に戻すと疋早に歩き出した。裸のリックを置いて。

「おーーー 着替えるまで待ってくれよー」

……俺が人を好きになる？……

「まさかな……」

「待てって言つてるだろ？」

「早くし……」

振り向くといまだに真っ裸のリックが堂々と立っていた。

「はあ……はあ……とうあえず着替えさせて……」

「一分で着替えてくれ」

……一分後。

「よーしー出発だ！」

いつもの格好にもどったリックと共にロブンテロに向かった。リイといづ名の人物と会つために。

「ところでリック、後どれくらいでそのロブンテロにつくんだ？」

「そうだなあ……一日もあればつくとは思うが……」

リックは地図を片手に難しい顔をしている。

「リック……それ逆じゃないか？」

「そういうわれてみればそんな気がしないでもない」

見事に逆に持っていた。

「ガルフ……君に大事なことを言い忘れていたよ

神妙な面持ちでリックは切り出した。

「僕は地図が読めない」

「そんなことだと思ってたよ」

ガルフは呆れ顔で地図を手に取った。

「とは言つても俺もこの状況じゃわからないな」

二人は目印の何もない森の中にいるのだ。

「誰か分かる人が通つてくれたら助かるんだけどな」

リックがつぶやいた瞬間少し遠くで物音がした。

「シッ。誰かいる……」

ガルフは少しづつ足音を殺してそこに近づいていく。

「……誰……か……いる……のか……」

かすれた声がする。

「誰か倒れてるみたいだ」
「リック、手当てをしよう」

二人は倒れている人物の手当てをした。

「ほら、水だ」

リックは先程の川で汲んだ水を与えた。

「げほつ……ありがとう」

「お前どうしたんだその怪我は……」

ガルフは左目に眼帯をしている全身傷だらけの男を心配した。

「ジョイクという男と少しやりあいましてね……」

「ジョイク……」

「リック知ってるのか？」

「ええ……確かルワーノ軍狼牙の若手ナンバーワンだった男がそんな名前だつたはず……」

「あなたたちジョイクを知っているのですか？」

隻眼の男は少し身構える。

「まあ少しだけだ……そつ身構えるな。俺はお前を襲うつもりはない」

「そうそう。僕たちは戦う意思はない。それに怪我に響くぞ?」

なおも警戒を解かない隻眼の男。

「少し訳アリでね……警戒するに越した」とはないんですね

「それならこっちも訳アリだ」

「とりあえず礼は言つておきますよ」

「そうだ。あんたロブンテロという場所を知らないか?」

「ロブンテロ? 知つてますが……」

「それは良かつた。教えてくれないか?」

「ここから北に三時間ほど歩いたところにありますよ」

「なんだ結構近づいてたんだな。ガルフ、今日には着くぞ」

「そうだな。ありがとう助かつたよ」

「一つ聞きます。あなたたちはルワーノ軍ですか?」

隻眼の男はマントの中で力を込める。

「ルワーノ軍……違うな」

「そうですか。それなら良い旅を……」

「ああ……」

ガルフとリックは隻眼の男に教えてもらつた道を急いだ。

「なあリック。さつきの男只者じゃなかつたな」

「ああ。かなり出来ると見た」

「それをあんなに深手を負わせるとは……そのジェイクはかなり強いのか?」

「僕もガルフとほとんどを地下牢で過ごしてゐから詳しいことは良く分からぬけど、狼牙のこととは説明できるよ?」

「狼牙?」

「狼牙とはキングルド直属の部隊なんだ。強さは他の部隊とは桁違
い。以前そこの若手ナンバーワンだったのがジェイクという男さ」

「ジェイクか……どこかで聞いた名前だな」

「今はその狼牙の隊長を務めているとか聞いたが……相当強いんだ

ろうな

「ほう……ん? ジェイク……思い出した」

「ガルフ知ってるの?」

「確かに武道会の決勝で当たつた相手だったかな……」

「そうか、当時からジェイクの強さはキングルドの次だと言われていたからな……当然誰もがジェイクが優勝すると思っていたんだろうが……」

「当時十歳の俺が勝つてしまつたからキングルドはあせつて俺を監禁したんだな」

「みたいだね……ガルフも充分すぎるほど強いな」

「ここ数年の地下牢暮らしうつかりなまつてしまつた可能性も否めないがな」

「今はあの薄暗い地下牢から出たんだからどんどん強くなるさ。ガルフはまだ十七歳なんだし。あ、ロブンテロが見えてきたぞ」

ロブンテロの入り口までやつてき二人は啞然とした。

「これは酷いな……」

リックはその騒然とした雰囲気につぶやいた。

「一足遅かつたようだな」

見渡す限り略奪された後で一杯だった。

「こうなれば一刻の猶予もないね」

「さつそくリリイについて聞いてまわる」

二人は町の住人にリリイについて聞いてまわったが、手がかりは全くなかつた。

「少し一休みしようかガルフ」

「ああ」

二人はレヴォと言つ喫茶店に入つた。

「しかしそく考えてみれば解放軍のリーダーの事なんだから外から來た僕たちに情報もらすわけないよな」

「ああ。手がかりはゼロだつたな。まあこうやつてリリイとか言つう女のことを見きまわつていればあるいはと思ったが……」

「ガルフ。どうやらビン『らし』い……」

ガルフとリックはその喫茶店の異様な雰囲気に気がついた。

「リック。これはどう思つ?」

「どうやらここは少なくとも関係があると見た」

二人は喫茶店の客に囲まれていた。

「お前達か。リリイさんを嗅ぎまわつてゐる一人組みつてのは」「まあ間違ひではないな。リリイはどういふ？」

ガルフが客にらみつける。

「素性の分からぬやつに話す必要はないな」

「まあまあガルフ、説明が足りてないぞ?」

「そうか。俺はルワーノ反乱軍のリーダーのガルフだ。リリイに話があつてここまで来た」

「ルワーノ反乱軍だと?」

密たちがざわめき始めた。

「す、少し待つていの……」

相変わらず密たちに囲まれたまま十分が過ぎた。

「リリイさんが会つてもいいそつだ。」この場所へ向かえ

男は一人に紙切れを渡した。

「ふん……邪魔したな」

二人は喫茶店を後にした。

「さて、ここにいればリリイに逢えるのかな？」

「さあな。俺達をはめる罠かもしれないぞ」

一人がやつてきたのは町外れの今にも崩れそうな小屋の中だ。紙切れの指示ではここで待つているとリリイにあえると書いてあつたのだ。

「お前達がリリイ様に会いたいという者たちか？」

突然ドアが開かれ帽子を田深に被つたヒゲを生やした男が現れた。

「ああそうだ。会わせてもらおう」

「……ついてこ」

ガルフとリックはヒゲの男についていく。どんどん森の中に入つていった。

「ここだ。入れ」

一人が着いたところは洞窟の入り口だった。中に入ると屈強そうな男たちが数人いる。

「それでリリイはどうだ？」

リックはそれらしい人物がいないことに気がつきヒゲの男に聞いてみた。

「ここにいる」

ヒゲの男はそういうと帽子をヒゲを取つた。

「なんだ。お前がリリイだつたのか」

「ええ。直接見たかつたし相手も油断するから」

「单刀直入に言おう。俺はルワーノ国で反乱を起こした軍のリーダーであるガルフだ」

「付き人のリックです」

「その軍のことは聞いてるわ。なんでもルワーノ本国を攻め落としたとか」

「ああ。紛れもなく俺の軍だ。そこで俺達と手を組まないか?」

「それは出来ない話ね。いくらあなたたちがキングルドに反抗する軍だとしても結局はルワーノの軍ですもの。あたしたちの目的はシャインテラスを再構築することなの」

「そんなことは分かつてゐる。そこで提案がある。協力してキングルドを倒した後、元シャインテラス領はお前達解放軍に、ルワーノ領は俺達反乱軍がそれぞれ統治する」

「悪い話ではないわね……ただ、逆に怪しそうなわね。そこまでし

てあなたたちルワーノ反乱軍にメリットがあるとは思えないんだけ
ど」

「そんなことは百も承知だ。だがそれ以上にキングルドを倒したい
んだ」

「確かにあなたガルフといつ名前だつたわね」

「ああそうだが?」

「確かに七年前から失踪しているキングルドの息子の名前もガルフだ
つたと思うけど?年齢はあなたと同じくらいで」

洞窟がざわめいた。

「確かに俺はキングルドの息子だ。だがだからこそ色々あるのさ」「
まあいいわ。結論を出すのに一日くれるかしら?今日はここで泊
まつていきなさい」「
「そうさせてもいいよ」

ガルフとリックは一日待つこととなつた。

「なあリック……どうなると思つ?」「
「そうだなあ……反応はよかつたね」「
「この交渉が成功すれば一気に道は開けるな」「
「成功することを祈つて寝ようか」「
「ああそうだな……おやすみリック」「
「おやすみ……」

次の日の朝、二人は騒々しい音で日が覚めた。

「何事だ?」

「さあ? 火事でもあつたのかな?」

一人はリリイのいる洞窟の開けた場所までやつてきた。

「どうしたんだリリイ」

リリイは難しい顔をしている。

「シャインテラス解放軍の拠点のリード村とスナイ村が何者かに襲われたわ」

「誰かわかつていなかのか？」

「今情報収集中よ」

「リリイ様！ 状況報告を致します！」

「ええ、お願ひ」

「スナイ村の方はジェス様が撃退された模様。ただ、リード村の方は全滅です！」

「なんですって！ 一体誰がやったの？」

「相手はルワーノ反乱軍と名乗ったそうです！」

「なんだと！ その情報は本当なのか！」

リリイが反応する前にガルフが食つて掛かる。

「間違いないそうです！」

「そんな馬鹿な……」

「ガルフ……こうなつた以上あなたを帰すわけにはいきません……」

リリイは静かに剣を抜く。

「ちょっとリリイさん待つてください！ これは何かの……」

リックは必死にリリイを止めようとす。

「黙れ！ やはりルワーノを信用してはいけなかつた……一人とも無事には済まない！」

「くつ……ガルフ！ こゝは一回退きましょ！」

「ああ。 それがよそそうだな」

ガルフとリックは弾かれた様に出口へと向かつた。途中数人立ちはだかつたが全て自身で吹き飛ばした。

「逃がすなーー！」

そんな声があちこちから聞こえてくる。やつとの思いで洞窟から出る一人。

「くそ！ 一体どうしたことだ？」

「わからない……とりあえず僕たちは一回ルワーノに帰ろ！」

「そうだな……グールを問いたださないといけなくなつたな」

「もう少し……もう少しで上手く行つたのに……」

「ガルフ。落ち込むのは全てやつてからにしょ！」

「そうだなリック……」

いつしてシャインテラス解放軍との協定は失敗に終わった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5801c/>

リアルジャスティス

2010年10月9日23時34分発行